

シパダン島紀行

【今までの経緯】

1回目が92年8月、2回目が93年5月、そして今回の2001年8月が3回目になります。

92年頃は名前すら聞いたことのない日本人がほとんどで、シパダン島がどこにあるのか、ほとんど情報が無く、当然旅行会社もダイビングショップのイントラも回りの日本人は誰も知りませんでした。

シパダン島が世界に登場したのはジャック・クストーが88年に行ったあと、ヨーロッパの雑誌で初めて紹介されました。

シパダン島はボルネオ島東部、マレーシアとインドネシアの国境に近いマレーシアのサバ州に位置しています。

日本から初めて行ったのは89年後半でダイバーの大半は日本にいるアメリカ人でした。

私が知ったのはこの情報が89年12月に某雑誌の片隅に掲載された小さい記事でしたが、スゴイ海だと思って即行動を開始し、予約の申込みをしたところ、90年はテントしかなくキャパはたったの13人だけでした。

90年と91年はヨーロッパ人で予約が満員でしたので、92年の申込みを1年前に電話してやっと予約ができました。

【92年8月のシパダン島】

海亀が1年中交尾している海亀だらけの無人島で、別名タートルアイランドと言われていました。海亀の卵を採って生活している一人のタートルオジサンがただで、そこへボルネオ・ダイバーズのロン氏がこのオジサンと交渉し、この無人島でダイビングする権利を買いました。

バラクーダの大群約500～600匹、ギンガメアジの大群約1000匹、カンムリブダイの群れ約60匹、ホワイトチップリーフシャークがアッチコッチに寝ていました。サンゴの種類が非常に多く、皆んなとても元気に成長し、小魚はもうゴッチャリで、海亀にいたっては毎回のダイビングで10匹以上も遭遇し、こんな海が地球にあったのかと我が目を疑いました。

おそらくこの当時のシパダン島の海は世界一と思われます。

【93年5月のシパダン島】

92年と比較するとやや透明度は悪くなりましたが、相変わらず魚影はスゴイの一言でした。

93年5月当時もまだ、あまり日本では知られていなく、まだまだダイバーは少なかった。帰る時に現在のSDC（シパダン・ダイブ・センター）の建替工事が始まっていました。

【2001年8月のシパダン島】

92年、93年当時のシパダン島のイメージはほとんど無く、海亀の多いただの海に

なっていました。近い、安いも手伝って94年～97年に日本人が大挙して押しかけ、すっかり海の中が荒らされました。全盛期のシパダン島のキャパは約200～300人でリゾートが5～6軒ありました。

マレーシア政府が気付いた時は既に手遅れで、98年頃から入島人員制限をすると宣言しましたが、実際には2000年から開始されて、1日の島の人員は80人に制限されました。

そして、とうとう2005年から入島禁止になりました。

92年に私が作ったビデオを観て私の所属しているダイビングショップから、入島制限までに数百人のダイバーがシパダン島に行きました。シパダン島が荒廃したのは私のビデオにも原因があるので、今回はその責任を感じてシパダン島の現状調査を目的に行きました。

97年～98年の世界的なエルニーニョ現象により、シパダン島も例外でなくサンゴがダメージを受け、ほとんど死んでしまう白化現象が出ました。現在は少しずつ回復していますが、まだ10%程度で完全に元通りになるには数十年かかるでしょう。

2000年4月23日午後7時半頃にフィリピンのイスラム原理主義『アブ・サヤフ』がシパダン島に上陸し、外国人20人を拉致しました。そして半年以上も監禁し、1人が見せしめに首を刎ねられ、各国大使館と身代金交渉をして大金を手にし、国際的な大ニュースとなりました。

現在日本では『危険度2』地域となっているため、旅行会社は絶対ツアーを出さないなので、個人で行くしかありません。

シパダン島へ行くための港（センポルナ）ではマレーシア海軍の軍人が数十人いて、センポルナ沖には巡洋艦1隻がいつでも出港できる態勢で待機していました。

1日に1回センポルナから警備艇が来て警官が上陸し、週に2～3回マレーシア空軍の飛行機が島の上空を低空飛行で旋回していました。

只、ダイバーが少ないため島自体はのんびりムードで、93年頃のシパダン島に近い雰囲気でした。

ビデオにはカンムリブダイが沢山映っていますが、昔と比べて1匹1匹が小ぶりで、ギンガメアジの大群も数が少なく小ぶりで、バラクーダにいたっては大群がまったく見れず、僅かに2～3匹だけでした。沖で見たダイバーもいたようですが、透明度が悪く残念ながら見れませんでした。ホワイトチップリーフシャークの数が劇的に減少し、昔は沢山いたのに今回は余り見れませんでした。これはシパダン島だけでなく、世界中の海で人類がサメを殺している現実の証拠で地球規模の出来事です。

海の世界連鎖の頂点に立っているのはオルカ(シャチ)でサメは2番目です。

オルカはオタリアや魚以外にホオジロザメ(ジョーズ)やクジラも襲って食べますが、サメはアシカ、アザラシ、オットセイなどの脂肪分の多い生物を好んで食べ、増え過ぎないように間引きしています。また病気の魚や弱った魚を食べ、健康な魚群の『種の保存』に役立っている海の掃除屋です。サメは他の魚と違って繁殖に長い日数が必要です。

このままサメが世界中の海から大量に減り続けると、人類はいつか海の急激な変化によって大自然から大きなオツリを貰うことになるでしょう。

昔のスゴイ魚影の面影があった、あの時のシパダンが今や伝説になろうとしています。その郷愁の想いと今後の回復願望を込めてビデオのタイトルを『伝説の海』に決めました。

【見どころ】

・カンムリブダイの群れのクリーニング。

最大約2mの大きなカンムリブダイが4～5cmほどの小さなクリーニングフィッシュにクリーニングされるのを順番待ちしている珍しいシーン。今まで3回行って初めての撮影。

・ナポレオンフィッシュのアクビと捕食

2mほどの大きなナポレオンの口が前に30cmほど長く飛び出る大きなアクビの珍しいシーンとサンゴの下に隠れている甲殻類を物凄い体当たりでサンゴごと捕食し、砕いたサンゴのカケラをエラから吐き出すシーン。

・海底洞窟

SDC（シパダン・ダイブ・センター）の下あたりが、ちょうど突き当たりの奥になる水中洞窟。

水深約15mの入り口が非常に広く、そのホールの奥行きが約50mある。日本人も含めて今までダイバーが沢山死んでいるため、現在一般ダイバーはこのホールを回って帰ってくるだけで奥には入れない。

ホール奥の直径約1mの狭い穴を抜けると、やや広い空間があり、ここから迷路のように洞窟が枝分かれしているため、知らないダイバーが1人で潜ると帰りが分からなくなる。枝分かれした穴を進むと海ガメの死骸が沢山横たわっている。奥へ入り過ぎてしまっただけで迷って出られなくなり、窒息死したためと思われる。

（ダイバーも同じようにして死んでいる）

海ガメのひと息は最大50分ほどでダイバーの空気タンクも、この深度ではほぼ同じぐらいでエアー切れになる。

今回はSDCの洞窟スペシャリストと特別契約して、2人で一番奥まで入った。

・マクロ系生物のアップ

ウミウシ、キンチャクフグ、アケボノハゼ、ハタタテハゼ、シコンハタタテハゼ（ヘルフリッチ）、アオマスクなど。

・ナイトダイビングのカンムリブダイの群れ。

寝ていてほとんど動かないため、じっくり撮影できたのでアップが多い。

通常、シパダンのナイトは20時頃から21時頃で、人気があり大勢のダイバーでカンムリブダイが逃げるため、SDCのガイドを特別契約してマン・ツー・マンで一般ダイバーがいない21時頃からエントリーして撮影した。

今回はケーブダイビング（洞窟）とナイトダイビングを特別契約して、ガイドと2人だけで潜ることができたので良い撮影ができました。

また、今回より水中ライト2灯を赤色灯から自然光に近い白色灯に変えたので、以前よりかなり明るい綺麗な映像になりました。

以上
浜谷 優